

K S K

# きんずな

第161号

編集 神奈川県障害作連

責任者 海原 泰江

印刷所 株式会社Yuki Print

発行 平成29年11月3日  
年月日

## 福祉部 四課長インタビュー

障害福祉課長  
水町 友治 氏



障害サービス担当課長  
弘末 竜久 氏



共生社会推進課長  
柏崎 克夫 氏



共生社会啓発担当課長  
青木 淳 氏



今年度着任された水町障害福祉課長ほか、組織の再編成もあり、関連する四課長さんに海原理事長、柳澤理事がインタビューを行った。概要を報告する。

海原：津久井やまゆり園の事件を受けて県の再生基本構想策定に関する部会から検討結果報告書が出されています。このことについて課長さんたちといくつか意見交換をしたいと思います。

柏崎：まず共生社会推進課からお話しします。基本構想の部会では十二回にわたり熱心な議論をしていただき、最終の報告をいただきました。

事件の被害者でもある百三十人の方に対して入所施設としての受け皿は必要だということになりました。このうち新たに整備するのは、もともとあった千木良と、今住んでいただいている芹が谷の二ヶ所で整備。合計百二十名の定員で、ということになります。これについては定員を確保してもらったのはよかったというのがどのご家族の方も率直な感想として述べられています。

小舎化については施設を整備していく中で、やはり必要だということがありました。ユニットが十一人、その中でお一人分の短期入所ということで考えています。それと、機能維持ということ。県立施設として必要な役割と考えています。皆さん、二つに分かれたときに規模はそれぞれ小さくなる、機能を維持してもらえののだろうかと心配されています。医療的ケアあるいは強度行動障害のケアというのも、施設の規模に関わ

らず、維持していきます。

また地域生活移行の促進を意識していく、入所施設としての機能を地域生活を支えるための機能として活かしていくということですね。いくつかの団体からグループホームを作って受け入れていこうと積極的な姿勢、応援の立場でお話をいただいています。今後、意思決定支援をしていく中で、グループホームを見てみたいなどの声が出てくる中で相談させていただこうと思っています。設置についての周辺住民の理解ですが、新たな整備はその都度に、また、どこであってもそういう理解を得られる社会にしていかなければいけないという両方の要素があると思います。障害者理解、相互理解的なものは個々の施設整備と並行してやっていかなければと思います。息の長い取り組みとして続けていきたいと考えております。

海原：地域のほかの資源等をどう整理していこうと思っていられるか？地域生活を支える機能をこの施設の関係者だけではなくて、周辺のもう少し広い方たちにサポートしてもらおうとかいうイメージでよろしいでしょうか。

柏崎：短期入所の受け入れ、相談支援、家族支援の機能とか、地域生活ですから、拠点となる施設の周辺ということが実態は多くなるとは思いますが、その県立施設、あるいは周辺のいくつかの法人でというだけでなく、分け隔てなく対応していくつもりです。

水町：神奈川の自立支援協議会は三層構造でやってきましたが、機能をどう強化していくのが課題です。「地域」でしっかり対応していきたいと思います。

柳澤：全国的にも福祉分野では人材が不足している中、今まで以上に人材の確保が必要になる。若い職員を確保するのが非常に難しい。定年退職をされた方が、第二の仕事場として活躍している形も多いです。特にグループホームの人材不足は深刻で県としては人材の確保や育成をどのように進めていくのかをお聞きしたいです。

水町：グループホームの人材の話ですが、津久井の強度行動障害をお持ちの方を中心に、これから安心して地域で暮らすという意向を進めていくなら、受け皿をしっかりととしていかなければならない。

グループホームも選択肢の一つです。本人の意思決定支援をしっかりと行つた上での話で、ご希望が出てくれば必要な課題だろうと思います。

弘末：人材の確保が難しいということと、またグループホームの支援の質の問題ですね。ベースとしては給料の話。神奈川県で、というのなかなか難しいです。国の方に要望していくのが基本的なスタンスかと思えます。ただ神奈川県として先ほどから話が出ている、難しい方々の地域生活となると、最初に人数です。国の基準を上回ってどうにか配置できないか、今考えているところです。クオリティーのところというと、施設に勤めていればOJTという形で、座学ではなく、日々の業務の中で、先輩のやっていることを見ながら、カンファレンスなどで一つ一つ身につけていく。でもグループホームは一人職場で、そういう機会も少なく、人材育成につながらないと。重度の方を対象とするグループホームなら単に、加配をどうにかすればいいというだけでなく、職員の質の部分をあげなきゃいけない。今までの仕組みで

やっているグループホームではそこで人が育っていくかというとなかなかそうではない。なにか別のしかけが必要かと。大きなことだと思います。人財育成は県の仕事

だから研修会って話になるけど、研修だけではなく実のある、身につくようなしつけをしていかなきゃいけないと思います。また、重度の方とはまた違って中軽度の方の難しさについても認識していただきます。ご存じかと思いますが、県は従前からグループホームの運営費補助をやっていました。国の方はあくまで数で見積もっている単価に、神奈川県は、軽度の方についても上乘せしていると思います。いわゆる介護とか介助っていうことではない、別の意味の、社会的な意味での支援、その辺の対応ができるようにとの認識は従前からありました。

海原：加配ということだけでなく、身になるものをどうしていくか、まさに一緒に考えていけたらと思います。私たちは実態をいっばい持っている、その中で意見交換をしながらやり取りする中で、少し前に進んでいくのかなと感じます。あと、地域の方々の理解で

す。共生社会の啓発というところが一番になります。その部分をお話しいただけますか。

青木：私どもは昨年「ともに生きる社会かながわ憲章」を作りました。障害者なんて役に立たないんだから生きる資格はない、そんな犯行動機での事件です。残念ながらそれに同調するようなSNSなどもあり、とても不安になられたと思います。そういう社会じゃない。障害のある方も人格を持つ一人の人間として、互いに認め合って生きていく社会であるべきだ。一番伝えたい部分です。

海原：現実問題は、壁というか難しさがありません。教育の部分が必ず要なのかなと。学校の先生方自身がどういう姿勢を持って子供たちを導いていくのか。先生方の研修の場も含めて私たちのところを活用してほしいと思います。

青木：やはり生活の中に区分けされている部分があると思います。学校教育でもクラスが違ったり、社会に出ても程度の差はあれ、分け隔てが自然とできてしまっている。本来、分け隔てなく生活できる環境をめざしていかなければいけない、それではじめて日頃から

接することができる、認め合うことができ。理想論に近いですが必要だと思えます。

水町：どうしても、障害当事者、や団体、障害者と接している方が中心になっている。こういう事件が起きて、まあ大多数の方が自分たちとは関係ない、そういう暗黙の了解みたいなことがある。関係者だけで固まるのではなく開かれてやっていくことが必要だと。広い理解につながっていくにはいいなと思います。

青木：今「みんな集まれ2017」というイベントを企画していて、各企業様を訪問しています。仕事の中身によっては障害のある方が、集中心があつてミスが少ない、そういう仕事をお願いしているといった話も聞いています。個々の特性に応じた活躍の場面を見出していくような関係をもっと築けるとよいと思えます。

一番のねらいは日ごろ障害に対する無関心な方に関心を持ってもらうことです。今年にはチャレンジですが、まず足を運んでいただくこと。障害のある方と一緒に過ごす。そこで何か気づいていただけることがあるのではない



か。催し物としては音楽や、パラスポーツ体験。地域の事業所の方が、有名ホテルの料理長などのアドバイスをもら

い菓子、パン、ピザ等をイベントで販売する、そんな企画もあります。そして神奈川県が全面的にリードして催すのではなく、イベントの趣旨に賛同していただいた障害のある方や団体の方たちと企画を作り、また費用負担についても、民間の団体や企業さんにもお願いしてみんなで作りに上げていきます。

柳澤：やはり障害の理解や周知という意味では、単発的なイベントだけではなく、息の長い取り組みというのが必要だと思えますが。

青木：今年が初めてです。改善すべきところは改善しながら来年以降もこの趣旨での企画は続けていきたい。無関心な方に、関心を持っていただくところが難しい。一回やったら皆さんが振り返ってくれて理解が進むものではないと思っ

ています。ご指摘のように、徐々に積み重ねていくしかない。難しさは重々承知してはいますが。

水町：「ハイスクール議会」というのを毎年やっています。県内の高校生が議員になり、いろんな分野に分かれて委員会を作って県に対して質問や、提言をします。今年は一ツ「共に生きる」というジャンルで議論されました。障害福祉課として、ヘルプマークの説明をしました。福祉についてある程度関心があるであろう高校生でもヘルプマークを知っている人は一割くらいでした。

また、差別解消法が施行されて一年半、差別事例集を作って、日常生活、社会生活の中で、皆さん、どう考えますか？こんな対応もできたのではないかと投げかけ問題提起をしました。様々なきっかけを提供していきたいです。

海原：理解をどう進めていくかが、施設から地域へ、またいろんな形で生活をされていく方の豊かさにつながっていったらと思えます。いくつかの団体の方がグループホームの設置をして津久井やまゆり園の方を受け入れますと言ってくださっています。要は受け入

れるだけではだめで、きちん地域生活を支える機能を充実させていくことだと思えます。私たちはずっと地域で活動してきて、いろんなことが、連携してやれるのではないかと思えます。地域作業所から、障害福祉サービス事業所に替わり、前のようにダイナミックに動くということに少し制約が出てきているかもしれません。自分たちのありようももう一回、考えてみる時です。だからこそ県や市町村とも、よく話をして考えていく必要があると強く感じます。国が財政の部分で厳しくなってしまう中で、マイナスだけにとらえるのではなく、知恵や工夫をだして、暮らしやすいようになるといいなと思えます。本日はどうもありがとうございます。

お話を伺った四人の課長さん方から最後に、今回の津久井やまゆり園の事件はとてとても重いことであるが、これをきつかけにして、神奈川の福祉をより良いものにしていかなくてはならないという強い気持ちを持たいただき、インタビューを終えた。



## ～ふるさと納税を通して、地域に、 そして日本全国に、活力を与えたい～

地域の魅力（「情報」）が全国に発信され、寄附というカタチで地域に「おカネ」が届けられ、感謝の気持ちとしてお礼の品（「モノ」）が寄附者に送られます。「お礼の品」と同梱されたお手紙や地域の魅力を伝えるパンフレットなどが寄附者の手元に届き、お礼の品の生産地などを訪問するきっかけともなっています。

神奈川県でもこのふるさと納税の返礼品として認められ、積極的に活動している障害サービス事業所、地域活動支援センターがあります。どれも一定の品質を保つこと、またいつでもニーズにこたえられること、が求められます。それぞれの事業所からのPRを紹介します。

（社福）心の会 あすなろ学苑

横須賀市小矢部 4-19-4 TEL：046-852-0600



昨年9月より、横須賀市ふるさと納税の返礼品として「横須賀海軍カレー三昧セット」を製造しております。横須賀お土産コンテストで銀賞を受賞した、よこすか海軍カレーラスクとよこすかカレー味食べるラー油、よこすか海軍カレーレトルトが各2個、合計6個を箱詰めしたカレー好きにはたまらないセットアイテムです。

海軍カレーラスクは、生地を粉からブレンドし、何種類ものスパイスや旨み調味料をからめ、低温で焼き上げ、カレー風味のサクサクとした食感が好評でおやつにもお酒のおつまみにも合う逸品です。

カレーラー油は、ホタテ、エビ、イカ、玉ねぎ、人参等をじっくり炒めた食べるラー油で、炒め物の味付けのほか、食パンに塗り、溶けるチーズをトッピングしてトーストをするととても美味しい、意外な組み合わせだけど、ハマりますとのお声を頂いています。

そして、よこすか海軍カレーのレトルト。横須賀といえば海軍カレーというほど、全国ご当地カレーの知名度No.1にもなりました。ルーは市販品でなく小麦粉から炒って作る、牛肉か鶏肉を使用する等、各事業所が趣向を凝らしています。当店の海軍カレーは、ビーフカレーの中辛で、チャッネの甘酸っぱさ、スパイスの芳醇な香り、じっくり炒めた炒め玉ねぎの甘さ、牛バラ肉をコトコト煮込んだ濃縮スープがカレーにコクと旨みを生み出しています。一日最大5000食の販売実績があり、イベントでは行列ができるお店として知られています。

これらの製造に障害を有する利用者が関わっています。計量、材料を刻む、煮込む、瓶に充填する、商標シールを貼るなど、一人一人の利用者が役割を果たしながら職業的、経済的自立を目指しています。よこすかポートマーケット内スーベニアショップや観音崎京急ホテル等でもお取り扱い頂き、観光土産品として、ご購入頂いております。

**NPO 法人 ハーベストきくな**

三浦市南下浦町菊名21 TEL: 046-888-1357

今月から三浦市で、「ハートフルさと納税」ということで当事業所の製品を、ふるさと納税の返礼品としてとり扱ってくれることになりました。それに先だって市役所では、毎週水曜日「ハートフルマーケット」と銘打って、現在市内の4事業所が交代して各事業所の製品を販売していました。

その中から第1弾として、私たちの「ハーベスト・きくな」の仲間達が一生懸命作っている自主製品をセットして「至福のハーブティタイムを」と、「癒やしのハーブセット」と名付けて、返礼品に提供することになりました。



近くの畑で、私たちが栽培しているハーブを乾燥させたハーブティや、シューズキーパー、バスハーブ。そしてさらに、そのハーブなどをお菓子里に焼き込んだ、ハーブクッキーや、ミニパウンドケーキなどをセットして詰め合わせています。

すでに3個目の申し込みを頂いていて、夏の暑い時のきつい畑作業もこのことで皆のモチベーションアップとなり、ますます張り切っています。

**(社福) 寿徳会 松下園 ハッピーラボ**

秦野市戸川454-1 TEL: 0463-75-2511

平成28年10月に社会福祉法人寿徳会の新たな事業所として、就労継続支援B型10名・生活介護10名の20名定員で、障害者就労支援施設「ハッピーラボ」を開設しました。授産事業として、冷凍餃子の製造販売に特化して運営をしています。商品名は「幸せ餃子」!誰もが食べて幸せになれるがコンセプトで、素材にこだわった商品を作りあげました。神奈川県産の野菜・高座豚を使用し、包みあげる皮も産地も厳選しています。現在、販路拡大が急務ですが、慌てず少しずつ取り組んでいます。Yahooショッピング・ワウマ・ふるさとチョイスなどのインターネット媒体にも出品しています。今年的一大イベントとして、9月23日・24日に川崎競馬場で開催される2017全国餃子サミット「全国餃子まつり」に出店が決まりました!!是非お越しください。また、10月20日・21日には赤レンガ広場で開催される「みんなあつまれ2017」への出店、そして、11月9日・10日に東京ビックサイトで開催される「地方銀行フードセレクション(商談会)」にも出展が決まりました。その他にも、地域のお祭りやイベントにも積極的に出向いて、多くの皆様に「幸せ餃子」の味を知っていただきたいと思ひます。まだ、開設して1年にも満たない事業所ですが、少しでも多くの工賃を利用者の皆様に還元できるようにスタッフ一同、一生懸命取り組んでいます。皆さまのご支援、これからもよろしくお願ひ致します。





**(特非) 山晃央園**

平塚市御殿1-17-1 TEL: 0463-31-0723

“七夕の街”平塚で開催される「湘南ひらつか七夕まつり」は日本三大七夕まつりに数えられ、日本一ともいわれる竹飾りの豪華さが魅力です。

山晃央園作業所は「この七夕の魅力を訪れた方にご家庭にも持ち帰っていただき子どもの健やかな成長など願いが叶って幸せが訪れますように」との思いで、平成3年設立と同時に「ミニ七夕かざり」の製作販売を始めました。材料の調達やまつり期間中の販売活動につきましては多くの方々のご理解とご協力を頂いています。

この「ミニ七夕かざり」は当作業所が最も力を入れている自主製品で、一年間をかけて山や川堤などから切り出した竹を磨き、短冊を手作りし、飾りの組合せや配色などに工夫を凝らして完成していきます。

今年度は販売を始めて27年目となりました。新しく平塚市のロゴマークを入れた「願いごと短冊」を追加して、良きおみやげ、良き思い出として七夕のロマンをより楽しんでいただけるようにしました。今や山晃央園の「ミニ七夕かざり」は、豪華な飾りと共に「湘南ひらつか七夕まつり」の名物になっています。

そして今年5月このような歴史を持つ「ミニ七夕かざり」は、平塚市から推薦していただき市の魅力を発信する「ふるさと納税返礼品」としてふるさと納税サイト「ふるさとチョイス」に登録されました。大変光栄なことと利用者・職員一同喜ぶと共に感謝をしています。長さ70cm<sup>2</sup>本1組の素敵なお七夕かざりです。これからたくさん注文がくればよいと期待しています。



**NPO法人 ソーシャルファーム大磯**

中郡大磯町生沢法人 TEL: 0463-72-5329



私達ソーシャルファーム大磯では、ミニトマト、ルッコラ、ジャムなどの農産物を生産販売しております。

農業を通じて、私達は次の三点のことを主眼として支援しております。

- 1 利用者の経済的自立の支援
- 2 利用者の心身の健康を促進することによる精神的自立の支援
- 3 利用者の就労に向けての支援

障害がある方でも作業がしやすく、かつ生産性も年間通して安定できる栽培方法により神奈川県内でも高い工賃水準を維持しております。

大磯町のふるさと納税の返礼品として、以下の内容で取り扱っていただいております。

**「おいそ農産セット」**

(内容) 生はちみつ 160g、ミニトマト3パック、ミニトマトジャム 160g、ドライミニトマト 125g、イチジクジャム 160g、ルッコラ1パック

発行 神奈川県障害者定期刊行物協会  
〒222-0035 横浜市港北区鳥山町1752

編集 (特非) 神奈川県障害者地域作業所連絡協議会  
〒221-0844 横浜市神奈川区沢渡4-2

045(290)0501  
頒価 百五十円